Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介致します

合田 直弘

今月のこのコラムは、来年のG1英二千ギニー（芝8F）へ向けた前売りで大本命となっているピナトゥボ（牡2、父シャマーダル）をご紹介したい。ピナトゥボとは、フィリピンのルソン島にある活火山で、91年に20世紀でも最大級と言われる大噴火を起こしたことで、よく知られている。馬のピナトゥボも、近年でも有数の能力を持つと言われる期待の若駒で、ヨーロッパの競馬サークルに大ブームを起こしつつある逸材である。

ゴドルフィンによる自家生産馬で、同じくゴドルフィンの所有馬だった母ラヴァフロウ（父ダラカニ）の3番仔にあたるのがピナトゥボだ。母を管理したのは仏国の伯楽A・ファーブルで、競走成績は6戦2勝。勝ち星のうちの1つは、パリロンシャンを舞台としたLRラセーヌ賞（芝2200m）で挙げたものだった。母の6歳年上の半兄にG1伊グランクリテリウム（芝1600m）2着馬ストロビル（父マークオヴスティーム）、近親にG1スプリントC（芝6F）勝ち馬で、種牡馬としても大成功しているインヴィンシブルスピリットがいるファミリーの出身だ。

C・アップルビー厩舎に入った同馬は、順調に調整が積まれ、5月10日にウルヴァーハンプトンのノーヴィス（AW6F）で早くもデビュー。J・ドイルが騎乗した同馬は、馬群中団を追走した後、直線残り150mで先頭へ。ここから後続を3・1/4馬身突き放す競馬を見せ、見事に緒戦勝ちを飾った。すなわち、スピードに任せた競馬をしたわけではなく、溜めた脚を直線で炸裂させるという味のある競馬を、デビュー戦から見せていたのだ。

2戦目となったのが、3週間後の5月31日にエプソムで行われた条件戦（芝6F5Y）で、ここでは一完歩目でトモを滑らせ出負けする窮地に陥りながら、中団からきっちり差し切って連勝。続いて駒を進めたのが、ロイヤルアスコットを舞台としたLRチェシェイムS（芝7F）だった。このレースにおけるピナトゥボは2番人気（4倍）で、1番人気（2・25倍）に推されていたのは、前走カラのメイドン（芝7F）を3・3/4馬身差で制しデビュー勝ちを果たしていたA・オブライエン厩舎のロペイフェルナンド（牡2、ロペドヴェガ）だった。だが結果は、ピナトゥボがロペイフェルナンドに3・1/4馬身差をつける快勝。この段階で既に、来春のG1英二千ギニーの有力馬と目されることになった。

同馬にとっての4戦目が、待望の重賞初挑戦となった、7月30日にグッドウッドで行われたG2ヴィンテージS（芝7F）で、ここでのピナトゥボはなんと後続に5馬身差をつける快勝。4連勝を飾るとともに、重賞初制覇を果たした。そして、見ていた者に更に鮮烈な印象を与えたのが、9月15日にカラで行われたG1ナショナルS（芝7F）だった。

過去10年の勝ち馬のうち実に4頭が、翌春に英国か愛国の3歳クラシックを制しているという「出世レース」がG1ナショナルSだ。今年は9頭立てとなったが、実質的には、ピナトゥボで、デビュー2戦目から3連勝で前哨戦のG2デビュータントS（芝7F）を制しての参戦だったアーモリー（牡2、父ガリレオ）の一騎打ちと見られていた。

結果も、1着ピナトゥボ、2着アーモリーと人気通りの決着となったのだが、想定外だったのが2頭の間に開いた差で、ピナトゥボはアーモリーをなんと9馬身も後方に置き去りにしたのである。すなわち、レースを重ねるごとにピナトゥボの内容は良くなっているのだ。この結果を受けブックメーカー各社はG1英二千ギニーに向けた前売りで、ピナトゥボのオッズを2倍前後までカットしている。

同馬の次走は、10月12日にニューマーケットで行われるG1デューハーストS（芝7F）の予定。一部のメディアから「新怪物」との呼び声が飛び交いはじめたピナトゥボが、果たしてどんなパフォーマンスを見せるかに、大きな注目が集まっている。